神託の解体
――マッハ、フロイトとホフマンスタールの『エレクトラ』

青地伯水

1. 神なき世界の始まり

紀元前四世紀にギリシアで産声を上げたプラトニズムは、アレキサンドリアのプロティノスによる窯変ののちにネオプラトニズムとして西洋の思想界に脈々と受け継がれ、一方においてはキリスト教教学にも多大の影響を及ぼし、他方においては神秘主義思想としてヨーロッパ思想の裏の顔となった。キリスト教教学と神秘主義からなる二つの顔を持ったこの思想の、ヤヌスのごとき相貌から発せられる二つの視線は、あるいは反発してあるいは混交して、二千数百年に亘ってヨーロッパ思想界の隅々までを見通し、支配を行き渡らせてきたのであった。

このヨーロッパ世界に遍く存在するネオプラトニズムは、形而上世界の源として、善そのものである「根源的一者[1]」を措定している。そもそも無時間的な永遠が支配するこの「根源的一者」の世界において、この「根源的一者」から発出（Emanation）と呼ばれる質量の低下を伴わない分裂運動が始まったのである。この分裂運動は全一的な「根源的一者」から発出によって個体を生み出していった。個体が生まれることによって無時間的な永遠からその落胤である時間が生まれた。この時間に支配された世界が、われわれが通常の意味で現実と呼ぶ経験的世界である。

逆に言えば、われわれが行住坐臥する経験的世界の彼方に、日常のわれわれの感性によっては推し量ることのできない、無時間的な永遠に支配された超感性的な諸価値が、ネオプラトニズムによって措定されたのである。そのような諸価値が、言い換えるなら形而上世界が、われわれ経験的世界の諸価値を根底において規定している。そして経験的世界に置き去りにされたわれわれ存在者は、全一すなわち「根源的一者」から分裂した個体化の苦しみのなかで、「根源的一者」との再合一を求めて苦悩する。それゆえ人類史の長い時間の中で見れば、超感性的な諸価値への到達、そして「根源的一者」との合一が、経験的世界の存在者にとっての究極の目標となってきたのだった。

ところがプラトニズムの誕生以来二千数百年に亘る人類の歴史において、この探求の努力は最終的な到達目標に至ることはなく、「根源的一者」との合一はほとんど神秘主義世界あるいは文学上の夢想に過ぎず、必ずや徒労に終わってきた。その結果、プラトニズムはむなし

い成果のために無力感を伴ったニヒリズムを本質的に生み出し続けた。

一方、一九世紀後半になって、近代の合理的精神は人類史において未だ経験したことのない発展を見せる。合理的精神に基づく科学技術によって生産力は増大し、新たに生み出された都市部における裕福な中間層によって社会構造にも変化がもたらされる。それにつれて既存の共同体が解体されてゆき、キリスト教を核とした社会が揺るぎを見せ始める。また合理的精神の産物である科学的思考法を背景に、形而上世界の本質をなす真・善・美に代表される「超感性的な最高の諸価値[2]」の存在の有無までもが議論の対象となる。そして形而上世界の存在に疑念が呈せられ始めるのである。

人類が営々と到達を目指して努力してきた形而上世界は、そもそも実在するのであろうか、このような疑問を抱かなければならないのなら、このニヒリズムを生み続けた歴史をここで断ち切り、「根源的一者」と同定される神に死を宣告して、積極的に形而上世界を否定した方が、慢性的なニヒリズムに陥った状況から新たな世界像を生み出すことに成功するのではないか。一九世紀末の最後の四半世紀に、形而上学的実体を否定するこのような世界観が、哲学におけるニーチェを嚆矢として様々な学問分野で肯定され、次第にヨーロッパ社会全体に蔓延していく。

2. マッハからフロイトへ

若きホフマンスタールのいた一八九〇年代のヴィーンでも、ニヒリズムの克服が問題となっていた。しかしニヒリズムの根底にある実体喪失は、ホフマンスタールの場合には形而上学的世界においてだけではなく、さらに自我自身において起こる。従来の抒情詩人が前提としてきた詩的自我の存在が、ホフマンスタールにおいては確固としたものではなくなってくる。そこでホフマンスタール自身に起こった現象の一つが自己を対象化する自我分裂であり、もうひとつが絶え間なく移ろいゆく精神状態とそこに流入してくる表象と感情との中で、自我が不定型となってゆく自我解体である。

とりわけ自我解体過程に関するホフマンスタールの描写が、「その語彙と傾向において、実証主義的・自然科学的な哲学と心理学との同時代の指導者の思考法と驚くほどの一致を示している[3]」ことが指摘されている。「精神的実体と心的本質を否定し、それらを存在しないものとして議論することを目指す純粋に分析的で反形而上学的学問[4]」にホフマンスタールは自らの文学表現のよりどころを見出す。そしてこの当時「精神的実体」や「心的本質」を否定した上で、人間心理を解明しようとした人物のひとりがエルンスト・マッハであった。

ヴンベルクはホフマンスタールとマッハの共通点を論じる中で、特に自我の分析において二人の類似を指摘している。マッハによると「苦痛や快感と緊密に聯関している諸要素を一括して自我という一つの観念的な思惟経済的（筆者註――事実のもっとも節約的で最も簡単な概念的表現という意味）な単位とすることは、苦を避け快を求める意志に仕えている知性にとって、はなはだ有意義である[5]」。この有用性に基づいて自我が実体を持つかのように見なされているに過ぎない

のである。したがってマッハは「第一次的なもの〔根源的なもの〕は、自我ではなく、諸要素（感覚）である」[6]とみなす。自我は諸感覚の複合体でしかなく、「不変の、確定した、尖鋭に区画された統一ではない」[7]。つまりマッハは「人間の自我自体は虚構であって、感覚印象の組み合わせにほかならない」[8]と考えていたのである。

ヴンベルクはホフマンスタールとマッハに共通する認識として、「客観的で持続的な外的現実は存在しないのであり、自我がそれを知覚した瞬間にのみ、現実は見かけ上客観的に成立しているのである」[9]ということをあげている。このように瞬間の印象でしかない現実を不変であるかのように思わせる根拠はどこにあるのであろうか。マッハにとって見かけ上の不変性の根拠となるのは、「連続性」[10]である。逆にマッハにいわせれば、事物のみならず個人においても連続的記憶を持たなければ、少年・少女の自分と今の自分を同定することも困難なのである。

このような認識は、ヴンベルクによるとホフマンスタールが九〇年代の初めに特に問題にした「偶然性の問題」[11]と関わってくる。「他者は自我にとってああ見えることもあれば、こう見えることもあるのであって、しかるに他者の自我もまた相対性と相対化に従属しているのである」[12]というような考えは、マッハの実証主義的経験批判哲学に非常に近いとヴンベルクは述べている。

すでに見たように自我という人間の内面性をひとくくりにした概念は、感覚要素へと解体された。同様にマッハは外的現実をも感覚要素へと解体する。物体、自我、物質、精神は「特定の実用的な一時的で局限された目的のために案出された」[13]概括や区画に過ぎないのであり、すべては究極的要素、色、音、空間、時間等からのみ成り立っているのである。したがってマッハは「物自体」を否定し、個々の事物が「物自体」からどれほど等級的に離れているかなどは問題にしない。そして外的現実に含まれる事物が感覚要素の構成物に過ぎないのなら、価値概念が成り立たなくなる。

そこから帰結するのが判断停止と価値崩壊である。ホフマンスタールが『チャンドス卿の手紙』のなかで詳細に語ったチャンドスの価値判断を放棄する状態にこそ、このマッハの感覚一元論が反映していることをヴンベルクは詳述している。そしてこのチャンドスの症状は次第に自我解体へと亢進していく。

さて、ホフマンスタールが『チャンドス卿の手紙』に続いて筆を執ったソフォクレスのギリシア悲劇の改作『エレクトラ』にも、このマッハの影響の反映が見られる。夫殺しの姦婦クリュテムネストラは、時間感覚に混乱を来している。夫殺しの現場で負ったトラウマによる記憶の断絶が、時間感覚の混乱の原因である。「私は突然わからなくなる／私を怒りのあまり震わせたことを／あの男（筆者註、夫殺しの際のパートナー・エギスト）が今日いったのか、／ずいぶん前のことだったのか、そしてめまいを覚えるわ」[14]このような時間感覚の混乱の中で、自我のあり方に確たるものを感じられなくなっていくクリュテムネストラはさらに深い混乱に陥っていく。「私は突然わからなくなる、私が誰であるのか」（79）という発言は、明らかに自我解体の兆候を示している。

このような危険な状況を彼女に引き起こしたのが、姦夫エギストとともに彼女が実行した夫アガメムノン殺しであることはいうまでもない。しかし彼女はこの事件に対して自らの行為を正当化しようとはせず、事件自体を否定するのである。「そこにあの人（アガメムノン）が立っていて、／私がここに、あそこにエギストが立っていた。／まなざしが交わされたが、何も起こらなかった／そうするうちにあなたのお父さんのまなざしが、／死にゆく中でゆっくりと恐ろしく変わっていった。／［……］／そのあいだ私は何もしなかったわ」(82)。アガメムノンに布をかぶせ、そのうえからエギストに斧で殴りつけさせたにもかかわらず、クリュテムネストラは「何もしなかった」と強弁する。

このように自らの行為を否定するものは、自我の解体あるいは分裂を招くことは必定である。なぜならそもそも自我は、自らの行為の積み重ねを記憶することによって連続性を維持している。行為を否定することは、記憶に歪曲をもたらすことになり、ひずみを残さないためには、否定した行為の記憶を無意識の世界に抑圧しなければならない。これによって生まれた記憶の空白部分が、自我の連続性に断絶を生み出すことになる。ここに自我をも感性的な諸要素に還元してしまうマッハの感性的要素一元論の影響を読み取ることは可能であろう。感性的な諸要素に過ぎない自我は、連続性を失うことによって、その同一性をも失うのである。

しかし抑圧された記憶は、夢の中に繰り返し現れることで、抑圧した自我に反撃を仕掛ける。その結果、復讐をおそれる彼女は「うんざりする」ほど「彼（オレスト）の夢を見る」(84)。「夢が彼女の力を食い尽くして」(84) しまい、憔悴の中で彼女は、次第に平静な精神状態を保つことが難しくなっている。クリュテムネストラの場合も苦悩と行為は、すでに負っているトラウマに起因しているのである。

クリュテムネストラの自我解体の錯乱をトラウマに還元するならば、ホフマンスタールが、クリュテムネストラに夫殺しを正当化する理由を語らさなかった理由も明らかになる。つまり娘イフィゲーニエを犠牲に捧げたアガメムノンへの復讐というような内面での倫理的葛藤は、トラウマに突き動かされるクリュテムネストラには問題にならないのである。

3. ホフマンスタールと精神分析

一九三七年、「自我を世界、無意識、抑圧されたもの等の中へ雲散霧消させる傾向の根底には、もうひとりのヴィーン大学教授ジークムント・フロイトの精神分析が、結局のところあるのではなかろうか」[15]と、フロイトの精神分析が、エルンスト・マッハの経験批判主義と並んでホフマンスタールに重大な影響を与えたことをネフは指摘した。また、三八年にエリザ・マリアン・ブトラーは、ホフマンスタールのギリシア悲劇を「グレコ・フロイト神話」と名付けた[16]。ギリシア悲劇をモティーフにしたホフマンスタールの神話世界をフロイト理論の影響下にあると見なしたのであった。

すでに第一次世界大戦以前にシュニッツラーやベーアー・ホフマン

の作品について、精神分析的アプローチを試みた夥しい数の研究があった一方で、ホフマンスタール研究においてはこの方法による接近の少なさのほうが目を引いたことをヴォルプスは指摘している。[17] もちろんホフマンスタールの『エレクトラ』に精神分析的なものが織り込まれていることは、エーミール・ローレンツをはじめとする当時の批評家達にとっても周知の事実であった。[18]

ヴォルプスは、その後の研究においては精神分析的方法でホフマンスタール作品は充分に論じられておらず、七〇年代の研究においてもポリツァーとヴンベルクの名前を挙げることができるにすぎない、と言う。しかしヴォルプスによれば、シュニッツラーやベーアー・ホフマンと「同時代のヴィーン文壇においてもっとも詳細に精神分析と取り組んだのは」、[19] やはりホフマンスタールであった。

ホフマンスタールが精神分析を受容していたことは、ヴィーン郊外ローダウンの彼の自宅にある図書室の蔵書から明らかである。彼はフロイトとヨーゼフ・ブロイラーの共著である『ヒステリー研究』に書き込みを残しており、とりわけブロイラーによって執筆されたアンナ・Oに関する症例に関心を示したことが『エレクトラ』の記述から伺われる。

アンナ・Oはベルタ・パッペンハイムという女性の仮名であり、一八八〇年七月、当時彼女が一九歳の時に父親が病に冒されたことによって、ヒステリー症への道をたどることになる。彼女の性格の本質的特徴は「同情にとんだ善意」[20]であり、彼女の気分には「愉快になるにせよ悲しみに沈むにせよ、すぐ度をはずす傾向があった」。彼女は「強い活動力（欲動）」をもっていながら、きわめて単調な生活を送っており、「性愛的な要素が発達していないことは驚くほどであった」。したがって彼女は恋愛とは無縁であり、やり場のない強い活動力を向けるはけ口を求めていた。それゆえに彼女は「私だけの芝居小屋」[21]と呼んでいた白日夢の世界にふけったのである。この事実は後の彼女の症例と無縁ではないと考えられる。

七月に尊敬する父親の看護をはじめ、彼女は最初の一ヶ月で精根尽き果ててしまった。それゆえ彼女は次第に衰弱していき、貧血や拒食などの症状を示すようになった。その後、一〇月半ばから麻痺、錯話、交叉性斜視による視野狭窄などの症状を示し、翌年四月の父の死によって強いトラウマを負うものの、一旦は軽快する。しかしそれに続いて持続的な夢遊状態が現れ、ついにははっきりと区別できる二つの意識状態の交代に陥る。一方の状態では彼女は「悲しげで不安のようではあるが、どちらかといえば正常である」。[22] 他方の状態においては彼女は、幻覚を見ており、ヒステリー症をあらわにし放心し粗暴な行動をとる。しかしそれらの行動を記憶していることはなく、周りの人々に責任を転嫁して、乱れた衣服や部屋を見て嘆くのであった。「しかし、父親が亡くなっていると言うことだけは分かっているようであった」。[23]

彼女のヒステリー症の根底には父に対する異様なまでの良心の呵責があったことが、治療の過程から明らかになっている。彼女は父親の看病中に隣の家から聞こえてくるダンス曲を聴き、自分もダンスを踊りたいという衝動に駆られる。しかし看病中にそのような衝動をもったことが、かえって父への罪の意識となり、その衝動を彼女は抑圧し

なければならなくなる。その結果彼女は、ダンス曲を聴いただけで良心の呵責から、声門痙攣を引き起こし激しい咳に陥るようになる。

さらには、刊行されたテキストには暗示されているに過ぎないが、ようやく七〇年代に発見された彼女の病歴に関するオリジナルのテキストから、母親との不和の原因も明らかにされている。[24] つまり母親は、病状の進んだ娘を死期の迫った父親から遠ざけ、父親の死を娘にしばらくのあいだ秘匿しておいた。娘の健康をおもんぱかっての行為が、かえって彼女に苦悩と憎悪を生み出してしまったのであった。

さて、ホフマンスタールの戯曲『エレクトラ』では、父の死によってその心にトラウマを刻み込まれたエレクトラは、精神の均衡を失ってしまう。あたかも二人の人格であるかのように、分裂した自我が一つの肉体の中に住んでいる点で、エレクトラはアンナ・Oと類似の症例を示している。彼女の復讐劇が展開する舞台は、「宮殿の裏手と、召使いたちが住む低い建物に取り囲まれた中庭」(63) である。ホフマンスタールは『上演上の注意書』において、「書き割りには、古代劇に付き物である円柱や幅広の階段といったものは全然要らない。それらは興ざめさせるだけで、心理的に作用することはない」(379) と述べている。ということはこの舞台装置は、観客に心理的作用を及ぼすことを狙っている。さらにホフマンスタールは「書き割りの性格は、狭隘さであり、逃れがたい閉鎖性」(379) であると述べている。この書き割りのもたらす「心理的効果」とは、すでに多くの論者が指摘していることではあるが、[25] エレクトラの心理状態を観客に体験させることである。彼女の心は外へ向かって開かれることはなく、外からの働きかけもない孤立と孤独とに陥っており、彼女の精神が抑圧されていることがこの書き割りに表現されているのである。

エレクトラが舞台に現れるとき、「血痕のようにイチジクの枝越しに床や壁に夕焼けが射している」(66)。血塗られたかのようなこの光景は、血に飢えたエレクトラの内面の比喩である。そして舞台を血に染めるような光が、闇へと暗転していくこの時間こそが「彼女の時間」(63) であり、エレクトラが「すべての壁がこだまするほど、お父様を思ってわめき立てる時間」(63) なのである。

アンナは昼間の時間に次第に放心状態が優勢となっていき、日没とともに深い自己催眠状態とも言われるもうひとつの自我の状態へと移行する。彼女にトラウマを植え付けたのが、父親の看病であり、徹夜の看病が彼女にこのような一日のサイクルを身につけさせたのであった。したがって彼女は昼間の比較的正常な時間においては現在を生きているのであるが、日没とともにやってくる自己催眠状態のなかでは、一年前に父親に付き添っていた時間に引き戻され、病床の傍らに縛られているのである。[26]

エレクトラも「彼女の時間」がやってくるとヒステリー症例を示し、母とその情人エギストが「あなた（アガメムノン）を風呂場で打ち殺し、／あなたの目の上に血が滴り、／風呂場に血のもやがたちこめた」(67) 時間に立ち戻る。言うまでもなく彼女のトラウマを形成している体験の時間へとである。この時間のなかで、彼女はかつて誓った復讐を反復し、血まみれで殺された父の墓に「逆さにした瓶からのように、血が／ぐるになった人殺しどもから流れ出す」(67) まさしく血

で血を洗う復讐の光景を白日夢として夢想するのである。エレクトラも、自己催眠状態でアンナが父の病床にとどまり続けたように、父の死の時間から離れようとはしない。父の死以前の時間は失われており、それ以後の時間は父の死の時に還元され、エレクトラが生きているのは父の死の時だけである。未来に存在しているのは、彼女が拘泥している父の仇への復讐の時のみである。それゆえ彼女のなかでは時間は流れることはない。エレクトラは現実には父の死と復讐の時とのあいだを生きているのであるが、意識のなかで彼女にとって生きることができるのは、父の死が起こった過去の一時点であり、未来に目指すのが復讐の一時点である。[27] エレクトラは、ブロイアーが症例として呈示したアンナと同じく、過去において形成されたトラウマが原因で現在を生きることができないのである。

4. 運命に取って代わる人間の内面性

フロイトは、若い女性のヒステリー症に性の問題が関わっていることを主張したが、ヒステリー症の原因としてとりわけ近親相姦をめぐる問題を挙げていた。しかし彼は後に症例を研究するうちに、実行されていない空想の中の近親相姦もヒステリーを引き起こすことを主張している。[28] それが『ヒステリー研究』における「カタリーナ」の例である。当の女性が充分に事態を認識することはなく、また現実には未遂に終わった近親相姦体験が、カタリーナのヒステリーの原因となったのである。

フロイトは一八九〇年代のあるとき、山間の宿屋で女将の一八歳ぐらいの姪（実は娘）カタリーナから、二年前より神経を患っており、ひどく息切れがすることを訴えられる。彼は即座にこれがヒステリー症の前兆である不安発作であることを見て取り、彼女の心に「その時はいつもとてもこわい顔」[29] が現れることを突き止める。二年前、彼女は宿屋の女将の夫である叔父[30] が料理人の「フランツィスカの上にのっている」[31] 光景を目撃する。その時彼女は一六歳になるやならずで、何が起こっているのか分からなかったが、後日叔母にその事実を話して、夫婦の間に大げんかが起こり、カタリーナはすべてを知ることになる。そして彼女に嘔吐が始まった。

このトラウマの体験に先立って、彼女がやっと一四歳になった頃、叔父と峡谷への旅行に出かけた。彼女が夜中に目を覚ますと、叔父の「身体を感じた」。叔父は「あれがどんないいことか、お前には分からないんだよ」[32] と言って、ベッドの中で彼女に迫るのであった。「彼女は叔父の攻撃が性的なものだと、はっきり気づいてはいなかったらしい」[33]。彼女は二年後にフランツィスカと叔父を見たがために、嘔吐を覚えたのではなく、その時、初めて二年前の事件の謎が解けて、吐き気を催したのである。そして彼女の不安発作と共に幻覚の中に現れる「とてもこわい顔」が、離婚訴訟の時に「お前さえしゃべらなければ」といって、飛びかかってきた逆恨みをした叔父の顔であったことが明らかになる。

ホフマンスタールはカタリーナの症例をもとに『エレクトラ』の近親相姦モティーフを描写している。[34] エレクトラはオレストを前にして、

かつて美しかった頃の自分について語る。その中で彼女は、「手つかずの裸身が／むせかえる夜に神的なもののように／輝くときに感じる／処女のおののき」(101)、「この甘美なおののきを／私は父に捧げなければならなかった」(102) と述べている。明らかに近親相姦を連想させる表現であるが、ここではアガメムノンとエレクトラとが行為の実行に及んでいたか、空想上のものであったかの判断は措くとしよう。いずれにせよ「私が自分の肉体を愛でるたびに、／父のため息が、父のうめきが／私のベッドにまで届かなかったかしら」(102) とエレクトラが嘆くほどに死者となったアガメムノンは「嫉妬深い」(102) のである。

それにもかかわらず黄泉の国のアガメムノンは、エレクトラに「花婿を遣わした」(102)。その理由は、エレクトラの妹クリソテミスの発言から明らかになる。クリソテミスは父の死にまつわる苦悩のあまり過去を否定し、「今日から明日までも何も覚えておれない」(71) ほどトラウマを受けている。それゆえクリソテミスは「ここを立ち去って」、「悪夢を忘れ」(71)、「子供を授かり、出産する」(72) ことを望んでいる。もしエレクトラがクリソテミスと同じ願望を実現すれば、アガメムノンのために復讐をしてくれる娘がいなくなる。アガメムノンは嫉妬深いがゆえに、クリソテミスのような結婚願望の実現によって、エレクトラが父の仇をとらずに宮殿を後にすることを許さない。そこで彼はエレクトラに代替的な「花婿」を遣わす。

「父は私に憎しみを／目のくぼんだ憎しみを花婿として遣わした。／そこで私は毒蛇のように息づく／あの残忍な男を眠れぬベッドで／私のうえにのらせてやると／あの男は、男と女のあいだに起こる／すべてを私に無理矢理に教えた。あの夜々に、悲しいかな、あの夜々に／私はすべてを分かったわ」(102)。エレクトラの自己催眠状態の中で「憎しみ」は、カタリーナにとっての恐怖と同じように、顔の形で現れてくることが「目のくぼんだ」という表現から明らかになる。これは「憎しみ」の単なる擬人化ではなく、具体的人物を示唆している。すなわちエレクトラのベッドに入ってきて、「すべてを無理矢理に教えた」、「憎しみ」を具現する男は、「残忍な男」でもあることから、アガメムノンを殺した父の従弟エギストに他ならない。エギストは従兄の娘エレクトラを凌辱する。それゆえエレクトラはこう嘆く。「私は新婚の夜もなしに、／処女のようではなく、／子を産む女の苦悩を感じはするけれど、／何も生みはしなかった」(103)。彼女は凌辱を受けた苦しみの中で、結婚や出産の喜びを断念してきたのである。これによりアガメムノンの嫉妬深い意図は果たされる。

エギストによるエレクトラへの性的暴行が現実であるのか、エレクトラの幻覚に過ぎないのかという疑問はある。ポリツァーの解釈では、この凌辱場面はエレクトラの幻覚と考えられている。[35] するとカタリーナの症例と同じく、実行されなかった近親相姦がトラウマとしてエレクトラを支配していることになる。

しかし「私がすべてをようやく知ったとき、／私は賢明になり、人殺しどもは／――母とそのそばにいる男のことよ――／私のまなざしに一つだって耐えられなくなった」(102) というエレクトラの発言は、凌辱事件後のエレクトラの精神状態を雄弁に物語っている。つまりエ

ギストに性のすべてを教え込まれたエレクトラは、義父との近親相姦が残したトラウマによって自らを「賢明」であると思い込むほど錯乱を来たし、狂気に満ちた視線で彼ら殺人者どもを見つめるようになったのである。

さらに、この話を聞いたオレストは、エレクトラから「あんたは全身を振るわせているのね」(102)と指摘されるほど、怒りと混乱とのあまり身震いをしている。エレクトラの語る凌辱体験は、オレストに母殺しをも含む復讐を躊躇させないためのエレクトラの策略とも解釈できないことはないが、やはり錯乱に追いやられた姉の姿がオレストの心をうったのであろう。

しかし実のところ近親相姦が実行されたかどうかは、アガメムノン殺しに比すれば問題ではない。エレクトラの心に決定的にトラウマを残したのは、母と父の従弟による父アガメムノンの殺害である。このトラウマに引きずられて、エレクトラはエギストと母の殺害を心に誓う。そして父親への近親相姦的な愛情のために、結婚や出産を断念するに至る。その過程でエギストから何らかの性的な攻撃があったがために、父親への近親相姦愛は深まり、エギストへの憎悪は増幅されていく。重要なのはトラウマの形成過程であり、それに起因する行動である。ホフマンスタールの描くエレクトラは、すべて父の死によって始まったトラウマに動かされている存在である。

ヴォルプスによると、エルヴィン・ローデは『プシュケ、ギリシア人の霊魂崇拝と不死信仰』(一八九八)の中で、古代ギリシア人にとって超自然の力に思えていたものが、心的過程の外界への投射であることを指摘した。ローデによって「宗教的観念を心的過程へ解釈し直し、魔術的な解釈法を学問的なものに置き換えること」[36]が、ホフマンスタールやフロイトに神話と対峙し直す道を開いたのであったという。そしてギリシア神話を理解する彼ら二人のキー概念は投射である、とヴォルプスは主張する。

つまり、ギリシア人が運命と信じていた神々の託宣は、無意識世界に存在するトラウマに起因した心的過程が、外界に映し出されたものに過ぎない。運命とは、人間の無意識の世界を神々がすむ大空に投射したものに過ぎなかったのである。神託あるいは運命が個人の内面の問題に解体され、その精髄を失ったギリシア悲劇は、悲劇としての死を迎える。

ホフマンスタールは『アド・メ・イプスム』において「あらゆる宗教におけるすべての天空世界や黄泉世界が人間の内面から形成されていることを考慮すれば、すなわちすべては外界へと投射する力しだいである」[37]という言葉を残している。彼は二〇世紀初頭のヴィーンにおいて、それまで形而上の問題とされてきたことを、精神分析に深い信頼を置いて、人間の内面の問題に還元した。ホフマンスタールの『エレクトラ』は、神なき時代である二〇世紀の初頭に、神々の人間支配の象徴である神託と運命とを、解体し人間化したのである。

注

(1) Nietzsche, Friedrich: Werke in drei Bänden. Erster Band. München (Carl Hanser) 1954. S.32.
(2) 木田元：哲学と反哲学　東京（岩波書店）二〇〇四年　一四四頁。
(3) Näf, Karl J.: Hugo von Hofmannsthals Wesen und Werk. Zürich (Max Niehans) 1937.S.19.
(4) ebd.
(5) マッハ、エルンスト　感覚の分析　須藤吾之助／廣松渉訳　東京　法政大学出版局　一九七六年　一八頁。
(6) マッハ、前掲書　一九頁。
(7) 同右
(8) Wunberg, Gotthart: Der frühe Hofmannsthal, Schizophrenie als dichterische Struktur. Stuttgart (Kohlhammer) 1965, S.31.
(9) Wunberg, a.a.O., S.32.
(10) マッハ、前掲書　一九頁。
(11) Wunberg, a.a.O., S.32.
(12) ebd.
(13) マッハ、前掲書　二三頁。
(14) Hofmannsthal, Hugo von: Sämtliche Werke VII. hrsg. von Klaus E. Bohnenkamp u. Mathias Mayer. Frankfurt a.M. (Fischer) 1997. S.79. 以下、この巻からの引用は頁数のみを括弧内に示す。
(15) Näf, a.a.O., S.19.
(16) Vgl. Worbs, Michael: Nervenkunst. Literatur und Psychoanalyse im Wien der Jahrhundertwende. Frankfurt a.M. (Athenäum) 1988. S.272.
(17) Vgl. Worbs, a.a.O., S.269.
(18) Vgl. Worbs, a.a.O., S.270.
(19) Worbs, a.a.O., S.269.
(20) フロイト著作集　7　京都（人文書院）一九七四年　一五四頁。
(21) フロイト、前掲書　一五四頁。
(22) フロイト、前掲書　一五六頁。
(23) フロイト、前掲書　一六四頁。
(24) Vgl. Worbs, a.a.O., S.283.
(25) Vgl. folgende Untersuchungen: Worbs, a.a.O., S.279. ; Politzer, Heinz: Hatte Ödipus einen Ödipus-Komplex? Versuche zum Thema Psychoanalyse und Literatur. München (R.Piper & Co.) 1974. S.81; Baumann, Gerhart: Hugo von Hofmannsthal:>Elektra<. in: Hugo von Hofmannsthal. hrsg.von Sibylle Bauer. Darmstadt (Wiss. Buchges.) 1968. S.275.
(26) Vgl. Worbs, a.a.O., S.283.
(27) Baumann, a.a.O., S.276.
(28) Politzer, a.a.O., S.86.
(29) フロイト、前掲書　九八頁。
(30) フロイト、前掲書　一〇七頁。一九二四年になって、フロイトはカタリーナが女将の娘であり、したがって実の父親から性的誘惑を受けていたのだと言うことを追記している。
(31) フロイト、前掲書　一〇〇頁。
(32) フロイト、前掲書　一〇二頁。
(33) 同右
(34) Vgl. Politzer, a.a.O., S.86.
(35) ebd.
(36) Worbs, a.a.O., S.295.
(37) Hofmannsthal, Hugo von: Gesammelte Werke in Einzelausgaben. Aufzeichnungen. Frankfurt a.M. (Fischer) 1959. S.36.

（二〇〇六年九月二八日受理）
（あおじ　はくすい　文学部助教授）